

風 水 譚

第 2 号



蒙談会発行

橘の小戸の阿波岐原

— 日本神話に見る医療 —

柴田 眼治

四年前に宮崎に行った。山口から病院スタッフの久村浩隆課長に運転して頂き、熊本に一泊した。夜は名物の馬刺しと焼酎で一杯やった。馬刺しの各種が出てきて、タテガミというサクラ肉が珍しく美味しかった。

翌日、午前七時に出発して九州自動車道から宮崎道を南下した。その頃から篠つく大雨となった。「神話の国、宮崎に行くので、まるでミソギをうけるようだ。」と喜んでいる内に宮崎市内に到着し、嘘のように雨は止んで薄日が射してきた。平成十八年六月二十四日のことである。今回の宮崎訪問は、

气功研究会を主宰されている丸山かをる先生のお誘いによるものだ。先生とは数年前、日本統合医療学会で一緒にいたのがご縁で、私が「气功」に興味を持っていたので今回の旅になった。約束の時間にはまだ早いので、宮崎神宮を参拝した。このお宮は神武天皇とご両親が祭られている。楠の巨樹などがある深い森の参道を進むと、ちょうど婚礼の新郎新婦の列に出会った。花嫁の高島田と白い打掛が綺麗だった。本殿でお参りして、退出する時、鳥居の右手に神武東征伝説の巨大な古代船が復元され、展示してあった。

次に市内を抜けて平和台公園に行った。昔の八紘一字の塔がそびえている。中学の修学旅行で見た記憶がかすかにあるが、こんなに大きい塔とは思わなかった。平和のシンボル白鳩が広い芝生の上で数百羽も餌をついばんでいた。この塔は紀元二千六百年記念に建てられたとのことで、私の生まれた年でもあり、親しみが湧いた。観光バスも来ていてにぎやかだ。台上からは太平洋を一望できる。横手にある埴輪公園では古代人のハニワ群が色々なポーズをとって面白かった。資料館の方に平和台の歴史などを聞いて勉強をした。丸山先生と十二時に小戸の橋（おどのぼし）のたもとでお会いすることになっていたので市内に戻った。市役所前の橋通りの西に大きい橋があった。橋橋という。下を流れている大きな川が大淀川だった。

携帯で連絡し合ってようやく下流の小戸の橋の左岸で丸山先生とお会いできた。「お昼なので食事に



筑紫の日向：宮崎市内を流れる大淀川、
右手上流に橋橋が見える。
橋の袂にタチバナが植えてあるとか。

行きました」とお連れ頂く。竹に囲まれた創作料理のレストランで魚、宮崎牛やチーズフォンデュが用意されてあった。宮崎放送の満元英明氏が同席

され、宮崎のマスコミやイベントさらに神話街道のお話を聞く。全国銘酒会の会長でもあってお酒の話は詳しかった。ワインやビールなどご馳走で一同すっかり出来上がった。



丸山気功研究会から下流の小戸の橋を見る。
その先が河口。阿波岐原は左後方。
昔は河が蛇行して海へ。

本日泊まるシェラトンホテルの近くにイザナギノミコトがミソギをした所があると教えてもらった。三



小戸神社 祭神 伊邪那岐大神

昔は小戸橋の近くにあったが、江戸時代上流の現在地に鎮座した。

時過ぎに出来島町のビルの四階にある丸山気功研究会にお邪魔した。

娘さんの海老原総子さんの出迎えをうけて早速に丸山母娘による外気功の施術をうけた。頭から足の先まで気を送って貰ったが、全身がリラククスして誠に心地よい。実に不思議な経験であった。地元の方だけでなく、東京からも心身の癒（いや）しを求めてこられる人などで一年先まで予約が一杯だそう。部屋は片側はガラス戸で、ベランダに出て南を見ると遠くの濃い緑の山々には霧がかかって美しい。足元には大淀川がゆったりと左手に流れている。橘橋は上流、すぐ下流に小戸橋、さらに一キロ下流が河口で日向灘に注いでいる。

朝日は太平洋の水平線の彼方から立ち昇り雄大だろうと思った。昔、小戸の橋近くにあった小戸神社は現在では上流にある。さて、私たちが研究、実践している統合医療だが現代医療に加えて相補・代替・

相補・代替・伝統医療の種類

民間療法などの体系的医療	漢方、鍼灸、アーユルヴェーダ、チベット医学、ユナニ、その他各国の民族療法、ホメオパシー、自然療法、人智医学
食事・ハーブ療法	サプリメント(栄養補助食品、健康食品)、絶食療法、花療法、ハーブ療法、長寿食、菜食主義、メガビタミン療法、マクロバイオティク
心を落ち着かせ、体力を回復させる療法	バイオフィードバック、催眠療法、瞑想療法、リラクセーション、イメージ療法、漸新的筋弛緩療法
身体を動かして痛みを取り除く療法	太極拳、ヨガ、運動療法、ダンスセラピー
動物や植物を育てることで安楽を得る方法	アニマルセラピー、イルカ療法、乗馬療法、園芸療法
感覚を通して、より健康的になる療法	アロマセラピー、芸術療法、絵画療法、ユーモアセラピー、光療法、音楽療法
物理的刺激を利用した方法	温泉療法、刺激療法、電磁療法、温熱療法
外からの力で健康を回復させる治療法	指圧、カイロプラクティク、マッサージ、オステオパシー、リフレクソロジー、セラピューティクタッチ、外気功
宗教的治療法	クリスタル療法、信仰療法、シャーマニズム

今西 二郎 改変

現代医療を補完するCAM(カムと呼称)

Complementary Alternative Medicine
相補・代替・伝統医療

伝統医療を加味して個人個人にあった医療を行うもので、東洋医学も重要な柱となる。気功、セラピューティックタッチ、リフレクソロジー、アロマセラピー、鍼灸などが西洋医学の弱点である慢性疾患を補完できる。三時間位気功を学び、丸山先生の二十年来の貴重なお仕事について勉強した。

一つ葉海岸通りのホテル「シェラトン グランデ オーシャンリゾート」へ投宿した。昔のホテルシーガイアで経営がシェラトングループに代わっていた。ホテル内のシルクスクリーンに古事記の一文が染め抜いてある。久村課長とホテル一階の大浴場、露天風呂「月読み」につかって神様気分だった。夕食の時、丸山かをる先生が再び来られ、和食レストランで四方山話に花が咲いた。宮崎の海の幸に大いに舌鼓を打った。昼、夜とお酒を頂いてすっかり良い気分になって二人とも八岐大蛇状態で早めに就寝する。翌朝は六時に目が覚めた。ホテルロビー玄関



イザナギノミコトが禊祓（みそぎはらい）をした御池。
古代は大淀川がこのあたりを流れて海に注いでいた。

から西へ広がる市民の森や阿波岐原森林公園を散歩してみた。松など常緑樹の森林の中の遊歩道を進んでゆくと水鳥がさえずり、日が射してきて気分が誠に晴れやかとなる。十分くらいで「御池」すなわち「ミソギの池」のほとりに出た。大きな池で水面の大半は睡蓮で覆われていた。竹に挟んだ御幣が池中の東端に立ててあった。ここは神聖な場所なのだ。説明には黄泉国から日向の国にたどり着いた伊邪那岐之命がこの地で汚れた心身の禊祓（みそぎはらい）をしたとある。昔は池は海とつながっていたが、今は海岸から後退して孤立している。南西の道路づたいに歩いてゆくと十五分程で江田神社があった。宮崎の神話の絵の看板がユーモラスだ。



江田神社に建っているミソギの説明板
イザナギが禊して三貴子が生まれた。

イザナギ、イザナミノミコトをまつる延喜式内社でミソギの池はこれのお宮の境内地らしい。オガタマの樹や榊が群生している。阿波岐原は憶原とも書き、郷土史家によると青木ヶ原と言い、常緑樹が生えている場所の意だそうだ。イザナギはミソギをして三貴子が生まれる。左眼を洗うと天照大御神、右眼を洗うと月読命、鼻を洗うと須佐之男命が生れる神話は有名だが、その場所がこの池なのだ。

さて古事記や日本書紀によれば、イザナギ・イザナミノミコトが国造りをして、イザナミは最後に火の神を生んで身を焼かれて神去る。医学的には産褥熱から敗血症を併発して高熱のうち亡くなったのかと想像する。イザナギは悲しみに絶えず、イザナミを求めて黄泉の国を訪れる。その様子は「古事記」(次田真幸 訳注)によると、

「そこでイザナギノ命は、女神のイザナミノ命に会いたいと思つて、後を追つて黄泉国に行かれた――

略―女神の身体には蛆(うじ)がたかり、ごろごろと鳴つて、頭には大雷(おおいかずち)がおり、胸には火雷(ほのいかずち)がおり、腹には黒雷(くろいかずち)がおり、陰部には析雷(さくいかずち)がおり、左手には若雷(わかいかずち)がおり、右手には土雷がおり、左足には鳴雷(なるいかずち)がおり、右足には伏雷(ふすいかずち)がおり、合わせて八種の雷神が成り出でていた。

これを見てイザナキノ命が、驚き恐れて逃げて歸られた。――略―イザナギノ大神が仰せられるには、「私は、なんといやな穢(けが)らわしい、きたない国に行つていたことだろう。だから、私は身体を清める禊(みそぎ)をしよう」と仰せられて筑紫(九州)の日向(ひむか)の橘(たちばな)の小戸(おどの)の阿波岐原(あわぎはら)においてになつて、禊祓(みそぎはらえ)をなさつた」。

以上の神話の「禊祓へ」の事蹟をいにしえより神道

では祓詞としてとなえられている。次の通りである。

「掛(か)けまくも 畏(かしこ)き 伊邪那岐(いざなぎ)の大神(おおかみ) 筑紫(つくし)の日向(ひむか)の橘(たちばな)の小戸(をど)の 阿波岐原(あはぎはら)に 禊(みそ)ぎ 祓(はら)へ給(たま)ひし時に 生(な)り坐(ま)せる 祓(は)へ戸の大神(おおかみ)たち 諸々の 禍事・罪・穢れあらむをば 祓(は)へ給(たま)ひ 清め給(たま)へと 白(もう)すことを 聞こし召(め)せと 恐(おそ)み恐(おそ)みも 白(もう)す」

「現代人のための祝詞」(右文書院)の現代語訳では、「口に出して言うとしたら、そうすることも恐れ多い国土万物を生んだ男神である伊邪那岐(いざなぎ)の大神が、筑紫にあるという日向(ひむか)の橘(たちばな)という所の小さな水門の側(そば)にある阿波岐原(あはぎはら)で、身の罪や穢(けが)れを水に漬(ひ)かって洗い清め、災難などを除き清めな



阿波岐原のみそぎ池

さった時にお生まれになった祓え戸という、祓えをするための場所を守る四柱の立派な神々が、すべての悪いこと、災いを招くこと、さらには不浄なことが起こったとしたら、それらを除いてくださり清めてくださいと、祓（はら）え戸（ど）の神々に申し上げることを、祓え戸の神々はお聞きくださいと、恐れ多い恐れ多いと思つて祓え戸の神々に申し上げる」日本中の神社では全ての祭事に先立つてこの祓詞を神主さんがお唱えをされる。次いで白い祓（はら）え麻（ぬさ）でお祓いをされてから祭文を奏上される。参拝者の穢（けが）れが全て祓われるのである。



私の考察

祝詞に沿つて考えてみることにする。イザナギノミコトが愛妻を失つて黄泉国へ訪ねて行く。連れ帰ろうとして果たさず、変わり果てたイザナミの姿に驚いて逃げ帰る。これは古代の石室内の殯（もがり）の様子を描写したとされている。さて、今の世に蘇つた男神さまだが、愛妻を失つて大変なショックとストレスを受けたのだった。現代でも配偶者との死別はストレス度のトップである。まして蛆たかれる愛妻の変わり果てた異様な姿に完全に打ちひしがれたのだ。穢（けが）れとは東洋医学という気が枯れることで、元氣、活気がなくなつた状態である。うつ病になつた男神がたどり着いた所では日に向かう地―ヒュウガー宮崎であつた。ここは南国で暖かい陽の射す川のほとりだつた。暗く寒い黄泉国に比べると別天地である。冬と春の違いだつた。立春を

Life Change Unit

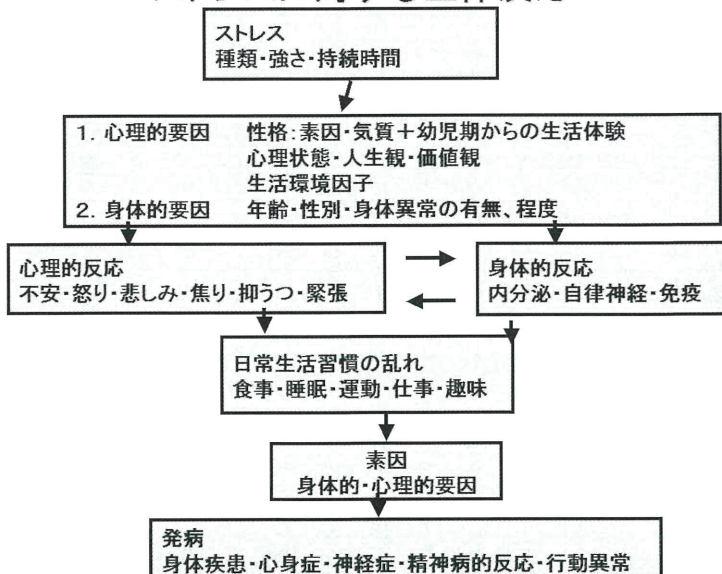
どんなストレスがあったら病気になるか？

生活上の出来事	ストレス度
配偶者の死亡	100
離婚	73
別居	65
留置所拘留	63
親密な家族の死亡	63
自分の病気あるいは障害	53
結婚	50
夫婦の和解	45
退職	45
家族の一員が健康を害する	44
妊娠	40
性の問題	39
家族に新しいメンバーが加わる	39
新しい仕事への再適応	39
経済状態の変化	38
親友の死亡	37

生活上の出来事	ストレス度
異なった仕事への配置換え	36
配偶者との論争の回数の変化	35
1万ドル以上の抵当か借金	31
担保物件の受渡し権喪失	30
仕事上の責任変化	29
子供が家を離れる	29
親戚とのトラブル	29
特別な業績	28
妻が仕事を始める、あるいは中止する	26
学校が始まる	26
生活状況の変化	25
習慣を改める	24
上司とのトラブル	23
仕事上の条件が変わる	20
学校が変わること	20
レクリエーションの変化	19

(九大心療内科 久保千春)

ストレスに対する生体反応



(九大心内 久保千春・九大病院長)

過ぎると川土手には土筆（つくし）が一斉に生えてくる。土筆を見つけると冬から春の到来を感じる。日射しにもわかに肌にやさしく、春一番の風も暖かく心地よい。身体が喜びを感じるのだった。ツクシのヒムカである。その川辺には橘（たちばな）の木が群生し、繁茂していた。黄色い実は二月には結実し、五月までたわわに実る。次いで青い実もなる。

代々実るので縁起が良いとされている。そして白い五弁の花をつける。葉は常緑である。常緑―長久を願うにふさわしいとされた。ニッポンタチバナ、ヤマトタチバナは遺伝子分析によつて日本原産といわれ、宮崎、高知、山口、和歌山、静岡などに自生している。古今和歌集に「五月待つ 花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする」とある。その昔、万葉の人たちも香りを愛でて橘の実を干して数個を糸に通して手首に巻いていた。香りを袖に移して楽しみ、長寿を願った。垂仁天皇の命により田道間守（た

じまもり）が常世の国に求めた非時香果（ときじくのかぐのこのみ）が橘といわれ、不老不死の象徴だった。香りは強く、実は酸っぱく種は大きい。一般に柑橘類のアロマ効果としては抗うつ作用、精神安定、疲労回復、リフレッシュ効果や胃腸の活性化作用がある。傷心のイザナギは全身に日を浴びて冷えた心と身体を温められた。ついでタチバナの香りに慰められた。男神は自然のアロマセラピーを受けたのだった。川のせせらぎや樹々の葉のそよぎに心が少しづつ癒（いや）された。音楽療法ではクラシックの名曲は川や海の波の音、木々のさやぎにみられる1/fゆらぎ現象があつて癒しに有効とされる。イザナギは身体の穢（けが）れをとろうと思ひ切つて水の中に入つて行つた。少し川の狭くなつた所を小戸、小門（おど）という。流れは早くなる。海側の河口のややゆるやかな流れに全身をつけてである。沖海まで出ると流れはゆるすぎて、禊（みそぎ）し

にくいのだ。海水は皮膚表面の蛋白質や脂肪などを落としやすいが、海から上がると身体がベトベトして爽快感がない。川の流れの淡水では脂気などの汚れは落ちにくい。河口近くの小門ではちょうど、淡水と海水が混ざって塩分も薄まり、身体にやさしく汚れも取れやすい。ヒトの血液の塩分濃度は海水の三分の一くらいにあたる。太古の海の濃度と同じで人類発生のふるさとの水だ。また、母の胎内の羊水の組成に似ている。血行も促進される。リラクゼーション効果は抜群である。小戸での「みそぎ」はアクアセラピー（水浴療法）やタラソテラピー（海洋療法）のミックスした療法といえよう。小門にある阿波岐原は憶ヶ原ともいい、宮崎では青木ヶ原ということだと言っている。常緑樹の茂った森林の中を川が海に開口する。常緑の森林から発生する



ヤマトタチバナの樹と葉・実・花

山口県柑橘振興センター研究総括の西一郎氏にタチバナの説明を聞いた。
平成 21 年 2 月 8 日筆者撮影。花は 5 月 10 日撮影。

酸素、オゾン、フイトンチットなどを大きく呼吸することによりイザナギは心身共によみがえったのだ。青海原に向かって両手を挙げて久方ぶりに大声を出してイザナギは涙と共に亡き妻イザナミに別れを告げたのだった。小戸の阿波岐原の水中に潜ると深い層、中層、浅い層で、流れと水圧は異なる。ケガレの落ち方が違った。住吉の三神はこうして生まれる。心と身体と魂のケガレがとれた時に、その不思議なパワーを祓戸の神のおかげと表現したのだった。

おわりに

祓詞に穢（けが）れや氣枯れを祓（はら）う力があると言われる。言霊（ことだま）の力である。神話を日光療法、大気療法、音楽療法、アロマセラピー、アクアセラピー、タラソセラピー、森林浴などの医

療の面から考えてみた。神話は古代人が実際に体験した話を私たちに教えているのかもしれない。記紀や祝詞に古代の医療の原像をみてみたが、基本の癒（いや）し効果は変わらない。五感や六感の豊かな神話時代は現代人が失った心身の再生能力が強かったのであろう。しかし現代人も自然にふれてその力を抽出した諸療法を応用すると魂を蘇らせることができると思う。極めて人間的な神々の神話にひかれた日向旅行だった。



「文化勲章」

橘の花、葉、実と勾玉をデザインしたもので、文化は永久にとの意匠といえる。京都御所紫宸殿の前庭に右近の橘、左近の桜が植えられている。文武の象徴。昭和天皇の意によってヤマト橘をデザインした文化勲章が作成された。



参考文献

「橘」

吉武利文 法政大学出版局

「古事記」

次田真幸 講談社学術文庫

「現代人のための祝詞」

大島敏史／中村幸弘編著

「勲章」

文書院
内閣府